

文 献 (主なもの)

FELDMANN, J. (1950): Compt. Rend. Acad. Sc. Paris. 230: 320-323.

HOLLENBERG, G. J. (1935): Amer. Journ. Bot. 22: 782-812.

KORNMAN, P. (1938): Planta. 28: 464-470.

オゴノリ果胞子の発芽能力

澤 田 武 男

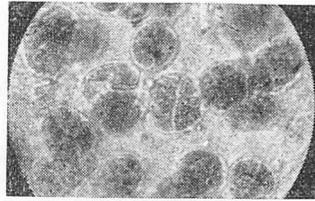
當研究室の紅藻胞子放出の實驗に關連して、オゴノリ果胞子の発芽能力が意外に強いと云うことが分つた。と云うのは、囊果内の一見未熟と思われる果胞子でも細胞分裂を行い立派に發育を始めることが分つたのである。これに關しては既に一昨年秋「紅藻胞子の放出に關する研究」の一部として於函館、日本水産學會秋季大會で報告したのであるが、當時は唯一回の實驗結果の發表であつたので或はごく特別な case かも知れぬと考へた。本年數回の實驗を再び繰返したところよくその様な事實がおこることを確めたので次に短報したいと思ふ。

材料は博多灣多々良海岸のもの。時期は放出の最盛期と思われる7月上旬。蔭干時間は數時間。順調に胞子放出を行つた囊果に就いて更に顯微鏡下で針を用いて果皮を壓縮し囊果内に残つた果胞子を人為的に壓し出し、次いで果皮を取除き囊果の中核部を取出した。以上、蔭干に依つて放出した果胞子(A)、人為的に壓し出した果胞子(B)、及び囊果の中核部に附着している果胞子(C)の3群を、一つのスライド上にリングを用いて夫々隔離して培養を行つてみた。これら3群の果胞子は大きさに於て異なつており、 $A > B > C$ のような關係にある。特にCは造胞糸柔組織^{*)}に接した細胞群で甚だ小さく、赤色彩も淡くて一見未熟であると思われるものである。

蔭干刺戟に依つて放出された果胞子(A)が殆んど損失なく旺盛な發育を示し、次々と細胞數を増して行くことは従來の實驗結果と一致する。ところ

*) gonimoblast-parenchyma (SJÖSTEDT, 1926) の譯。

が押し出した果胞子(B)でも、更に(C)に於ても大半は小さいながらもスライド上に落ちて附着し、(A)よりも分裂細胞の数が少ないとはいえ、外見上健全に發育を始めることは圖で示す通りである。



C 群果胞子の發芽
ca ×260

囊果内の一見未熟かと思われるような果胞子でさえこのように發育能力を有すると云う事實は他の紅藻に於ても普遍的なものか否かは現在研究中である。しかし少なくともオゴノリに於て發芽能力がこの様に旺盛であることは紅藻の „タネ付け” に關して一つの基礎資料となると思う。

(九大農學部水産學教室瀬川研究室)

伊豫の海藻5種を報告する

八木 繁一

1. *Caulerpa scalpelliformis* (R. BROWN) AG. var. *denticulata* (DECSN.) WEBER van BOS. クロキヅタ

昭和8年8月故岡村金太郎博士を松山市にお迎えして藻類研究會を開催したことがある。此の時會の終了後私は先生のお供をして宇和島港・土佐柏島・沖ノ島・清水港と藻類の採集をした。其の際宇和島港で樺崎に當時あつた愛媛縣立宇和島水産試験場に立寄つて標本類を觀る機會に恵まれた。其の時、其の標本の中から先生が発見されたのがこのクロキヅタで、先生は日本に於ての第二の産地がわかつたと非常に喜ばれたものである。此の標本の藻は昭和3年8月愛媛縣西宇和郡川ノ石の小島にて潜水作業に依つて8.5~13.5尋の海底から得たものである(之は昭和9年3月發行の日本學術協會に先生が詳しく書かれている)。所が此の僅かな而も貴重な標品も後同試験場が風水害の爲全くなくなつてしまつた。惜しいことをしたと私は度々前記川ノ石の海を採集したが今日まで之を得ることが出来ない。然る所昭和26年1月私